

(西暦) 2019 年度 博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名 (注: 学位論文題名が英語の場合は和訳をつけること)

作業療法士のワーク・ライフ・バランスと精神的健康の関係
・ 構造方程式モデリングを用いた横断的研究 -

学位の種類: 修士 (作業療法学)

首都大学東京大学院

人間健康科学研究科 博士前期課程 人間健康科学専攻 作業療法学域

学修番号 18896709

氏 名: 山田 優樹

(指導教員名: 小林 法一 教授)

注: 1 ページあたり 1,000 字程度 (英語の場合 300 ワード程度) で、本様式 1~2 ページ (A4 版) 程度とする。

【はじめに】近年、注目されているワーク・ライフ・バランス (以下、WLB) という概念は、勤労者の健康にとって重要な考えとして位置付けられている。これまでの研究において、WLB の崩れはバーンアウトを引き起こし、精神的健康に悪影響を与えると報告されているが、WLB は個人で改善を図ることは困難だと言われている。そこで、精神的健康と相関があるとされる作業有能性、つまり大事な作業ができていない状態に着目した。作業有能性が WLB やバーンアウトと関係していることが示されれば、WLB の崩れから生じる精神的健康の悪化を軽減する手掛かりになるのではないかと考えた。

【目的】本研究の目的は、作業療法士 (以下、OTs) を対象に WLB とバーンアウト、作業有能性、精神的健康との構造的関係性を明らかにすることであった。

【方法】対象者は、病院や施設など臨床に従事している全国の OTs とした。調査項目は、年齢や性別などの基本情報、WLB およびその両立度、バーンアウト、作業有能性、精神的健康であった。調査項目の記述統計量の算出、確認的因子分析、尺度間の相関分析、仮説モデルに基づく構造方程式モデリングにて分析を行なった。

【結果】全国 103 施設に 645 名分のアンケートを送付し、310 名より回答を得た (回収率 48.0%)。WLB 両立度「仕事と仕事以外の生活をうまく両立させているか」の質問の回答結果は「ちがう (7%)」、「ややちがう (62%)」、「まあそうだ (25%)」、「そうだ (6%)」であった。本研究の仮説に基づく構造方程式モデリングの結果、部分的に修正を必要としたが、モデルの適合度は CFI=0.938, TLI=0.933, RMSEA=0.060 と概ね良好な値を示した。

【考察】一般勤労者の WLB 両立度の回答結果「ちがう (6%)」、「ややちがう (24%)」、「まあそうだ (56%)」、「そうだ (13%)」と比べて、OTs が自身の WLB の状態に否定的な印象を持っていることが伺えた。本研究の仮説をもとに構造方程式モデリングを行なったところ、従来の研究で明らかにされている、WLB の崩れはバーンアウトを引き起こし、精神的健康に影響を与える、といった構造に作業有能性、すなわち大事な作業ができていない程度が関係していることが示された。これは、WLB の崩れは大事な作業ができない状態を引き起こし、さらにその状態がバーンアウトや精神的健康の悪化につながる、ということの意味している。本研究で示された WLB と作業有能性の関係は新たな知見であるため、更なる実証研究によってエビデンスレベルを高める必要があるが、この知見を受け入れると、作業有能性に視点を置いた支援が、WLB の崩れによる精神的健康の悪化を予防する可能性があると思われた。